



お経のことば



マサ
 ~^{マサ}応に童男・童女の身を以って度うことを得べき者には、
 即ち童男・童女の身を現わして、為に法を説くなり。
 カンセインホサツ
 妙法蓮華經 觀世音菩薩普門品第25 訳 岩本裕

今回のお経は観音経として宗派を越え広く読誦されているお経です。これは皆様のご家庭の御仏壇の前でも、日常用いられやすいお経のひとつです。

『観音様』として全国で親しまれている観世音菩薩ですが、有名な千手観音や、麗らかな女性のような如意輪観音も全て観世音菩薩と言えます。これ以外にも多様な形式を持つ観音様ですが、仏様の種類としては菩薩という位に置かれています。

菩薩とはサンスクリット語のボーディ・サットヴァを漢語にしたもので、その意味は『世間にまみれながらも人々を悟りへと導く人』です。そういう訳で、このお経には観音様が三十三種類もの姿をとって我々に説法をしてくれるということが書かれています。その三十三の姿は多岐に渡り、王様から普通の女性、子供、そして人間以外の愛すべき神様としても現れると説かれます。

上のお経のことばは、観音様を切に望む人が子供である場合、同じような子供の姿でその人を導いてくれるという意味です。そして人生のピンチと言える様々な困難の局面に於いて『念彼観音力』= (彼の観音様の力を信じなさい) というフレーズがその度に登場し、やがて奇跡がおきる・・・。観音経には主にそのようなことが説かれています。

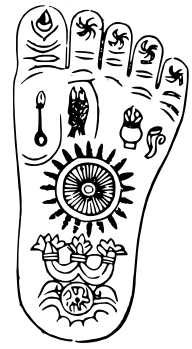
しかるに、皆さんに注目していただきたいのは観世音菩薩の『観世音』というところです。つまり、ふつうは音を聴くというのが正しい表現だと思いますが、敢えて『音を観る』となっているところが観音様の大きな特徴であると思えます。

そもそも、観世音菩薩は別名、観自在菩薩とも呼ばれます。そうです、あの般若心経の冒頭に登場する『観自在菩薩行深般若波羅蜜多』と同じ菩薩なのです。そのことから『物事を自由自在に観る菩薩』或いは『自らが在ることを正しく観る菩薩』と、仏教学のなかでは解釈されています。

しかし、ここで敢えて私の解釈を述べると、それはストレートに『音を観る』ことなのではないかと思うのです。音を観る、つまり我々が暮らす世間に飛び交う苦しみの声、その音をそれが誰から発せられたのかがわかるほど傍で観てくれている・・・。遙かな雲の上から我々を見下ろしているのではなく、三十三もの姿を取って我々に似た姿で世間にまみれて下さっているのだ、と私は解釈しています。

加えて、観音経が我々に説くところはそれだけではないのです。それは時に我々自身も観世音菩薩に成りえる可能性を持っている、さらに踏み込めば観音様になろうとすることを、このお経は求めていると思えます。

誰もが一度は経験したことがある、「あの時あの人に大変お世話になった・・・、もしあそこであの人に会わなかったら・・・。」そんな不思議な縁には、きっと念彼観音力があるからなのだと、私には思えてなりません。



- 9月25日(日曜日) 法話会・^{ヒガンエ}彼岸会・千体流し
午後2時半より護国寺にて90分の法話に続き彼岸会・千体流し
- 10月30日(日曜日) 住職と大瀧山に登る日
午前9時に護国寺集合(お弁当各自持参)(瞑想と散策します)
- 毎月28日 柱源護摩供・ヨーガ体操
柱源護摩供は午前9時と午後3時の2回です。
ヨーガ体操の日程は9月は10時半～、10月はお休み、11月・12月ともに10時半～
※葬儀が重なると変更される場合があります。



護国寺
 781-2155
 高知県高岡郡日高村九頭291
 ☎ 0889-24-7244
 ホームページ🌐gokokuji.site
 仏事に関してのお悩み、ご質問、
 行事に関するお問い合わせ等、
 お気軽にお電話ください。

